

令和5年、西暦2023年の干支は卯である。これにまつわる話題を少し述べてみたい。今や干支は、年末年始期間限定で意識を向けられる程度の存在になってしまったが、博物館では今も大切なテーマであり、年初に干支にまつわる展示を開催する機会が多い。普段は収蔵庫で静かに眠っているウサギも、卯年には展示場に各種登場して、このときばかりは「二兎を追って」もらえるのである。

よく言われる干支の順序の決め方について、神様の招集を聞いた実直なウシは早めに出発し、要領のいいネズミはウシに便乗してゴールで先んじたために一番を得たのだとは中国の故事である。ネズミを責めず、踏み潰さないウシの度量の大きさには感心するが、それに続くのは中国で尊重されるトラとタツ…ではなく、タツの前にはウサギが入る。いくら「脱兎のごとく」といっても、龍には勝てないと思うのだが、これは中国の神仙思想に由来するのかもしれない。月に棲む玉兎は、白に入れた不老不死の仙薬を杵で搗く尊い存在だ(図1)。決して「兎に祭文」



図1 兎兎爺 中国 20世紀前期
高 73.5cm (天理参考館蔵)

(牛に経文、馬の耳に念仏と同じ意味)などと口にしてはならない。それでも、小学5年生でウサギの飼育係を拝命し、家からせせとキャベツを運んでは大切に育てた私としては、フワフワと可愛い小動物というイメージが強い。ウサギに対して同様のイメージを持つ文化人類学専攻の先輩(日本人)から、異文化なエピソードを聞いたことがある。ローマに滞在して調査を続けていた彼女

は、あるときお祭りの景品(それも驚きだが)でウサギを獲得し、可愛いでしょうと周囲に見せたら大爆笑だったというのである。イタリアでウサギといえば食べるもの。柔らかい肉は大変好まれるが、野生のウサギは入手困難なために肉屋でも売っていないから千載一遇のチャンスだということに、この日本人ときたら…ということらしい。ウサギは「可愛い」ではなく、「美味しそう」と言うべきだと説教され、翌日には「日本ではウサギを食べずにペットにするらしい!」という話が笑い話として寮全体に拡散していた。「ウサギのように跳び上がる」ほど美味しいウサギ料理を一度食べさせてあげるから、それまで世話をしなさいと申し付けられたのは、ペットにするほどウサギを大切にする日本人のその先輩だった。数週間後、彼女が慈しんで太らせたそのウサギは、トマトとワインと香料で煮込んだウサギ料理と化した。確かに柔らかくて美味だったが、今も複雑な気持ちだとは先輩の言である。

しかし、日本でも「二兎を追う者は一兎をも得ず」や「兎を見て鷹を放つ」などウサギ狩りのことわざが目につく。旧石器時代からウサギは貴重な食料だったらしい。青森県の尻労安部

遺跡でおおよそ2万年前の後期旧石器時代に属する地層から、多数のウサギの歯が発掘されている。動物の歯の9割以上はウサギのもので、23個体分にも相当するということだ。長い年月で骨は溶け、それより頑丈な歯が残った。石器人は大型のナウマンゾウを追いかけて狩猟するダイナミックなイメージがあったが、小兵なウサギも狩っていた。その後、縄文時代の貝塚でも、シカ、イノシシに次いでたくさん出土するのがウサギの骨である。ウサギは骨が薄いために肉と一緒に叩き潰して食べた可能性が高く、実際は出土数以上だったのかもしれない。近年、縄文時代の高い人口密度を支えていたのはシカやイノシシの肉もさることながら、クリなどの植物食だったのではないかと考えられている。クリを植えて下草を刈るなど管理された里山はウサギが適応しやすい環境である。林が放置され、高木が密集して荒れてしまうとウサギは姿を消し、代わりにツキノワグマが増える。「うさぎ追いし、かの山」の有名なフレーズ、唱歌「ふるさと」は、まさに日本のふるさとである美しい里山を表現している。

また、優しいウサギだが、意外にも兜や刀剣の拵えなど武器器具の意匠にも多数採用されている。ウサギが上り坂は得意だが、下り坂は苦手という生態から立身出世を想定し、大きな耳から得る戦場の動きや変化に機敏に対応する能力を武士は期待したのである。藤ノ木古墳から出土した金銅製鞍金具にもウサギが華麗に表現されている。

図2は伏見人形の袴兎である。土人形や張子人形などの郷土人形には動物を擬人化したものがたくさんあるが、これはその典型で、日の丸扇を持ち、袴を着用した兎が凜と正座する姿を表現している。伏見人形は伏見稲荷大社門前の深草周辺で生産される土人形で、同社の祭神が鎮座する神聖な稲荷山の土を用いて作られ、参道で売られた。稲荷神は農耕の神であるため、この土で作られた人形は、たとえ壊れても田畑に入れれば作物



図2 伏見人形 袴兎 京都
昭和初期 高 15.0cm
(天理参考館蔵)

の出来が良くなる、土に帰ると尊ばれた。そのため江戸時代には参詣者が土産物として各地に持ち帰り、伝播した結果として全国の土人形の成立に大きな影響を及ぼすことになった。このモチーフにもウサギは登場する。ピンと立った大きな耳がまさか角に見えることはあるまい。「兎に角」の「兎角亀毛」とは仏教語に由来する言葉だ。ウサギに角、亀に毛がないように、現実にはあり得ないことを意味する。もともと、甲羅の後ろに毛をなびかせて泳いでいる亀は長寿の吉祥として古来しばしば描かれているし、現代のポケモンでもゼニガメが進化したカメールはお尻にふさふさとカールした毛を持つ。とにかく(いづれにせよ)、苦しい下り坂を脱兎のごとく駆け、得意の上り坂でも毛の生えた亀に油断して眠りこけたりせずに、最善を尽くす一年としたいものだ。